

古代エジプトの王妃と女王

内 田 杉 彦

明倫短期大学 歯科技工士学科

Queens in Ancient Egypt

Sugihiko Uchida

Department of Dental Technology, Meirin College

要旨

古代エジプトの王妃は、王の妻であり母であるとされた女神ハトホルの役割を地上で演じ、王の持つ上下エジプトの女神の性格を分与されて王権を補完する役割を果たした。王妃はときに若年の王の摂政となり、男子による王位継承が困難な場合には女王となったが、王権の伸張や時代の趨勢に応じて王妃の権威は強まった。変則的な存在と言える第18王朝の女王ハトシェプストも、古代エジプトの王妃と王権との密接な関係の延長線上に位置すると言えるだろう。

キーワード：古代エジプト、女性、女王、王妃、王権

Keywords: Ancient Egypt, Women, Queen, Kingship

1. はじめに

古代エジプト社会の中心に位置していたのは国王（ファラオ）だった。王権を守護する天空の神ホルスの化身であり、世界を創造した太陽神ラーの息子でもあるとされた王は「神性」を持つ存在であり、それゆえ絶大な権力を持っていたのである¹⁾。王は創造神の後継者、代理であり、統治者として人間界の秩序を維持するほか、自然界を支配する神々への奉仕、すなわち公的な祭祀や神殿造営などをおこなって神々と人間社会の関係を良好に保ち、宇宙の秩序を維持するとされた。

国王は男神ホルスの化身、ラーの「息子」とされていたから、男性であるのが建て前であった。行政や祭祀といった王の職務の多くは、現実には官僚と神官によって代行されたが、彼ら代理人たちもまた、一部の神官以外は男性であった。古代エジプトは男性の王と官僚に支配された社会であり、当時の女性に期待された基本的な役割とは、結婚して子供（とくに家を継ぐ男子）を生み育て、夫の家を守るというものであった²⁾。

しかし、女性のなかでも上流階級の婦人は大きな経済力と高い地位を持っており、その頂点には王の妻である王妃がいた。そのなかには、政治の実権を握り、女王として即位した者さえ存在する。「男性社会」だった古代エジプトにおいて、王妃はどのような役割と地位を持っていたのだろうか？

表1. 古代エジプト年表

先王朝時代（紀元前5500～3000年）
王朝時代（紀元前3000～332年）
初期王朝時代（第1～2王朝：前3000～2686年）
古王国時代（第3～6王朝：前2686～2181年）
第一中間期（第7～11王朝：前2181～2025年）
中王国時代（第11～12王朝：前2025～1795年）
第二中間期（第13～17王朝：前1795～1550年）
新王国時代（第18～20王朝：前1550～1069年）
第三中間期（第21～25王朝：前1069～715年）
末期王朝時代（第25～31王朝：前715～332年）
ギリシア系王朝時代（前332～30年）
プトレマイオス朝時代（前305～30年）
ローマ支配時代（前30年～後395年）

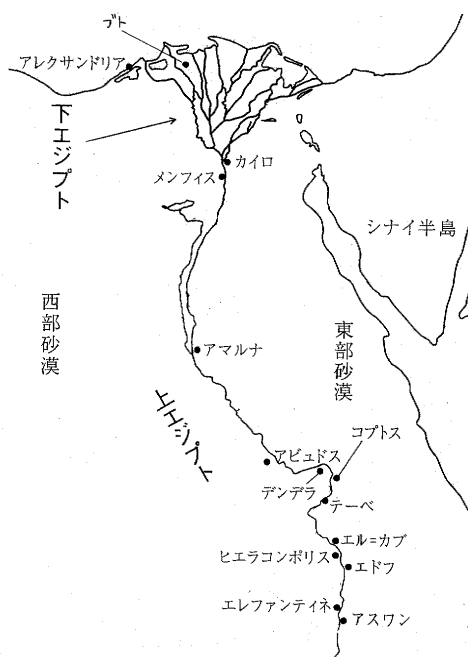


図1 エジプト略図

2. 王妃の役割と権威^{3) 4)}

古代エジプトにおいて王の配偶者を意味する最も一般的な称号は「王の妻」(ヘムト・ネスウト)であり、文献には古王国の初期からみられるが、すでに第1王朝時代から、もうひとつの称号、「王母」(ムト・ネスウト)が用いられている。この「王母」は、王子が王位を継承したあと、母親に捧げるものであり、この称号のほうが「王の妻」よりも早くから用いられていることは、王の配偶者の重要な役割のひとつが(基本的には当時の一般の主婦と同じく)夫の後継者を生むことだったことを暗示している。

当時の社会では、劣悪な衛生環境や医術の未発達のために幼児死亡率は高かったとみられ、夫が後継者を確保するために妻以外の女性を「愛人」とすることが認められていた²⁾。同じような事情から王も早くから複数の妻をもっていたとみられるが、中王国以前には、彼女たちの間に序列を示す称号はなく、基本的には皆が同列の「王妃」だった可能性がある。しかしおそくとも第13王朝時代には、彼女たちのなかでも最上位の称号として、「王の大いなる妻」(ヘムト・ネスウト・ウェレト)(正妃)が現れており、この正妃と王の間に生まれた嫡出の王子、とくに長男が、王位継承の第一候補となるのが普通となった。したがって王母となるのも正妃であるのが普通であり、少なくともそれが理想であったと言える。

正妃以外の王の妻たち(側室)は、嫡出の王子が

生まれないうち早世した際に備えて、その代わりとなる王子(庶出の王子)を生むための「王母予備軍」だった。側室は正妃と比べると影が薄い存在であって、王の格別の寵愛を受けるか王母とならないかぎり、あまり大きな影響力を持つことはなかった。たとえば、正妃や王母がそれぞれ自分の領地を与えられたのに対し、側室たちは国内の数カ所に設けられた「後宮」に集められ、そこで集団生活を営んでいたとみられる。以下の記述では便宜上、中王国時代以前については王の配偶者、それ以後については正妃と王母を、それぞれ「王妃」と呼ぶこととする⁴⁾。

さて、南部エジプトのヒエラコンポリスで崇拝されていたホルス神と王を結びつける王権理念は、エジプトの国土統一までにはすでに成立しており、最も古い王名として、王がホルスの化身であることを示す「ホルス名」が用いられていた¹⁾。国土統一後まもない初期王朝時代には、王妃の称号のひとつとして「ホルスを目にする婦人」(マアト・ホル)が出現しているが⁵⁾、これはまさに、こうした伝統的な王権理念に沿って、神なる王と王妃の密接な関係を示したものである。

第4王朝時代には、王を太陽神ラーの息子とする王権理念が確立、それを象徴する「方錐形ピラミッド」が王墓として造営されるが¹⁾、まもなく王妃たちも、小さいながらも王墓と同じ形状のピラミッドに葬られるようになる。第5王朝時代には、王が死後にラーあるいは冥界の支配者であるオシリス神となって永遠の生命を得るための呪文、『ピラミッド・テキスト』が王のピラミッド内部に刻まれるが¹⁾、この呪文も続く第6王朝時代には、王妃のピラミッド内部にも刻まれるようになる。王の配偶者たちにも王のような永遠の来世が約束されていたのであり、王権の確立とともに、王妃の権威もまた高まっていたとみることができるだろう。

古王国以降の神殿浮彫や墓壁画などの図像資料に表された王妃の姿には、その地位や立場を示す特徴がいくつかみられる。まず第5王朝時代までには、王妃のつける頭飾りとして、ハゲワシをかたどった被り物が現れる。ハゲワシの翼が耳の後ろに垂れ、ハゲワシの首と尾がそれぞれ、額と後頭部から突き出たこの被り物は、女神が人間の姿で表現される場合にしばしば用いられるが、とくにハゲワシの姿の女神、ネクベトが女性の姿をとる場合にかぶるものである。ネクベトは、ホルスの聖地ヒエラコンポリスの、ナイルをはさんで対岸にあたるエル=カブの

神であり、上エジプト（南部エジプト）の守護女神でもあって、おそらく国土統一以前から王権やホルスの信仰と密接な関係にあったとみられる。



図2 ハゲワシの被り物をつけた王妃（新王国時代の浮彫より）

上エジプトを守護するネクベトに対して、下エジプト（北部エジプト）の守護女神とされていたのが、デルタのブトで崇められていたコブラの姿の女神、ウァジェトである。この女神が人間の女性の姿をとる場合にも、ハゲワシの被り物は用いられたが、その頭部はハゲワシではなく鎌首をもたげたコブラに代えられており、この被り物もまた、第6王朝時代までには王妃に用いられるようになった。

エジプト全土を統一した王権がネクベトに続いてウァジェトとも関わりを持ったことは、統一後まもなく王の称号として、これら二柱の女神を意味する「二女主」（ネプティ）とそれを伴う王名、「二女主名」が採用されたことから明らかである¹⁾。この「二女主名」は、王が上下エジプトの守護女神に守られていることを示し、王がホルスだけでなく、これら二女神の化身でもあることを示すとみられる。こうした王名が採用されたのは、国土統一後まもない王が、全土を支配するにふさわしい宗教上の権威を必要としたためであろう。

頭部がコブラになったハゲワシの被り物は、ウァジェト女神が、王権理念のなかでネクベト女神と結びつき「二女主」とされた結果、作られた象徴とみることができる。王妃がこの被り物とその原型であるネクベトの被り物をともに用いたことは、王だけ

でなく王妃も「二女主」と同一視されていたことをうかがわせる。また、王と王妃の額には飾りとして聖なるコブラ、ウラエウスがつけられたが、王の額飾りは「二女主」を示すコブラとハゲワシが並ぶ形となることがある。王妃の額飾りとしては二匹のコブラが並ぶ例がみられるが、その場合、コブラはそれぞれ上下エジプトの王冠である赤冠と白冠をつけており、これもまた上下エジプトの守護女神である「二女主」を示すとみることができる。このように王と王妃の額飾りも、両者が「二女主」と深いつながりを持ち、おそらくはその化身とされたことを示しているのである。

王妃が王とともに「二女主」の化身とされ、これらの女神の被り物をつけることとなった理由としては、そもそも男神のホルスの化身であり、自らも男性である王が、女神の姿で図像に表されることは不自然とされたのではないかと推測できる。おそらくそのため、王と最も密接な関係にあり王位継承に関わりを持つ王妃が「二女主」の姿をとり、本来は王が持つ女神たちの立場を象徴する役割を担ったのだろう。すなわち王妃が持っていたと思われる「二女主」の「神性」は、王の神性の一部がいわば分与されたものとみることができる。また、ネクベトは第5王朝のピラミッド神殿浮彫に王の乳母として描かれ、ウァジェトはホルスの乳母という神話上の役割を持っているが⁶⁾、「二女主」の持つこのような「母」としての役割も、これらの女神と王妃を結びつける要因となっただろう。

この母なる女神としての王妃の役割に、より深く関わっていたと思われるのが、太陽神ラーの娘であり妻でもあるとされた女神ハトホルである。この女神の名前は「ホルスの館」と訳せるが、これはおそらくホルスがそこから生まれた「子宮」を意味するとされる⁶⁾。「オシリス神話」のイシスのように、ハトホルも古くからホルスの母とされていたのであり、それゆえ必然的に、ホルスの化身である王にとっても母なる女神となった。そしてこの女神は、おそらく王位継承者の母となる神というところから、王の妻ともみなされていたと思われる。こうしたハトホルの性格は、雌牛の姿をとるこの女神から乳を与えられる王を表す新王国時代の浮彫のほか、第4王朝メンカウラー王のピラミッド神殿から出土した王と神々のいくつかの群像にも見てとれる。この群像の多くは、王、神の姿で表された各地の州、そして日輪を挟む雌牛の角を頭上に戴く女性の姿のハトホ

ルが並ぶ立像であるが、ハトホルは王と並んで立つ姿だけでなく、神の姿の州と王を左右に配して中央に腰掛ける姿でも表現されている。この場合、前者は王と対等の「妻」の立場、後者は王よりも上位の「母」の立場を示すとみられるのである⁶⁾。

神話の領域においてハトホルが担っていた王の妻、母としての役割は、現実には王妃（正妃と王母）が果たしており、それゆえ王妃はやがてハトホルと結びつけられ、その「神性」を帯びるようになったとみられる。このことは雌牛の角と日輪というハトホルの象徴が王妃のウラエウスの頭上につけられ、あるいは王妃の頭飾りとして用いられている例が、とくに新王国時代の浮彫や彫像にみられることなどからうかがえる。

このように、古代エジプトの王妃は、王と同じく神性を持つとされ、王の持つ「神」としての側面を補完する役割を果たしており、それが王妃の權威の基礎をなしていたとみられる。王が行う祭祀の場面には、王妃がともに参列する姿が表される場合があるが、これも、王権を補完する王妃の重要性を示すものであろう。

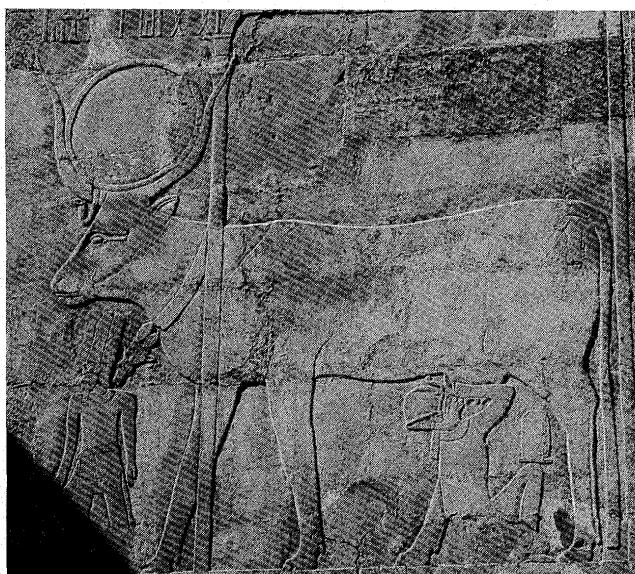


図3 王に授乳する雌牛の姿のハトホル女神

3. 人間としての王妃

神性を持つとされた王妃はしかし、王と等しい次元で神の化身とされたわけではなく、神々との関係においてはあくまでも「人間」として扱われた。このことを良く示しているのが、王が太陽神の子として生まれた経緯を表す第18王朝の神殿浮彫である^{3) 4)}。ハトシェプスト女王葬祭殿とルクソール神殿に現存するこの浮彫によれば、テーベの神アムンと太陽神

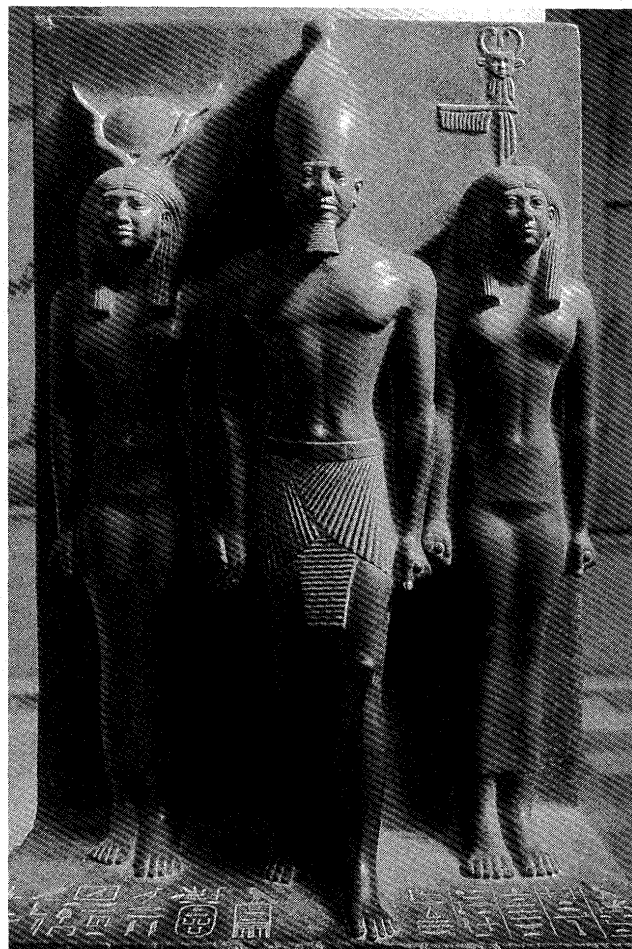


図4 メンカウラー王と神々の群像（左に立つのがハトホル女神）

が合体した国家神アムン・ラーが、先代の王に変身して王の妻の1人と交わり、それによって今の王が生まれたとされている。王の妻は、ここでは神の血筋を引く子を生む役割を担った「人間の女性」として扱われているのである。

現実には、王子のうち1人が王位を継承するとともに太陽神の子とされ、母親は太陽神と交わりをもった「王母」とみなされた。神との交流は、公式には王の特権とされていたが、王の母親も、一度とはいえ神と直接の関わりを持ち、神の血筋を王家にもたらし王位の継承を可能にしたとされたのであり、それが王母の權威を支える基礎のひとつとなったのであろう^{3) 4)}。王母となるのは先代の正妃とは限らず側室の場合もあったが、正妃の息子が順当に王位を継承し、それによって彼女が王母となるのが理想だったろう。そうなればこの「王母」は、太陽神の息子である先代国王の正式の「妻」であるとともに、太陽神の「妻」にもなったことになり、まさに太陽神の娘であり妻でもある女神ハトホルの役割を地上で体現することになるのである。

王妃が王の持つ神性を分与され、あるいは補完する役割をになう以上、王族の女性は王妃として最もふさわしいとされただろう。事実、異腹もしくは同腹の姉妹と結婚し、子をもうけたことが判明している王は少なくない。このような兄弟姉妹婚は、古代エジプトでは王家のほか、神々の世界に例をみることができる^{3) 4)}。太陽信仰に関わる創世説話、「ヘリオポリス神学」では、創造神アトゥムが自ら太陽神ラーになるとともに、男女一對の神、シュウ（大気）とテフヌト（湿気）を生み、この兄妹神の交わりにはじまる兄弟姉妹の神々の誕生と結婚によって世界が創造されたとしているのである⁷⁾。王がしばしば姉妹を王妃としたのは、太陽神の「息子」として、太陽神の子孫にあたる「ヘリオポリス神学」の神々の結婚を模倣したものとみることができる。太陽神の血筋が子孫の神々によって継承されたように、王家の血筋も王妃や側室の生んだ子供たちによって受け継がれるべきだとされていたのだろう。

とはいえ、これはあくまでも建て前であり、現実には、王族ではない女性が王妃となっているケースもしばしばみられる³⁾。その有名な例としては、第18王朝の国王アメンホテプ3世の正妃で次王アメンホテプ4世（アクエンアテン）の王母となったティイが挙げられるだろう。アメンホテプ3世が自らの治世の記念として作らせた「記念スカラベ」のなかには、彼女とその両親の名や地位を銘文として刻んだものがあるが、それによるとティイの父イウィアは軍人と神官、母トゥイアは、当時の上流夫人の常として²⁾、神殿で讃歌を朗誦する歌手や楽長の地位にあった。彼ら夫婦はおそらく娘が王妃となったおかげで、王墓地である「王家の谷」に葬られるという名誉を与えられている。

王族以外の女性が王妃に選ばれた理由については確かなことは不明だが、政略結婚の場合があったことは疑いない。たとえば第6王朝の国王ペピ1世は、王妃の1人や貴族たちによる陰謀を切り抜けたあと、おそらく王権の支えとするために、有力な地方豪族の娘2人を王妃に迎えている⁸⁾。エジプトが西アジアに広大な領土を獲得した新王国時代には、対外政策の一環としてエジプト王と異国の王女との政略結婚が行われた。興入れした王女たちは側室として扱われたが、第19王朝のラメセス2世と講和を結んだ大国ヒッタイトの王女は、おそらくヒッタイト側の要求に応じて「正妃」の称号を与えられているのである³⁾。

王妃や側室は行政上の職務を持たず、公式には政治権力を持たない存在だったとはいえ、ある程度の財産を与えられており、とりわけ自分の所領を持つ正妃や有力な側室は、かなりの経済力を持っていたであろう^{3) 4)}。彼女たちのもとには、その財産を管理する官僚たちがいたが、彼らは直接の主人である王妃や側室と利害を同じくする支持勢力となったはずである。王の妻にとって、息子が王位を継承し自分が王母となることは何よりの望みであり、とくに側室やその配下の官僚にとっては、より高い地位と富の獲得につながる。このため、野心的な王妃や側室が、自分の息子を強引に即位させるため、国王暗殺を企てる場合があった^{3) 4)}。この種の陰謀の標的となった国王としては、第6王朝のペピ1世（前述）のほか、第12王朝のアメンエムハト1世や第20王朝のラメセス3世が知られており、ラメセス3世に対する陰謀事件については、連座した人々の裁判記録が現存している。それによると、側室ティイの息子の王子を即位させるため王の暗殺をねらったこの陰謀は未然に発覚、後宮の官僚など共犯者たちは死刑に処されるか自害を強いられ、王子も自害している。側室ティイの処罰については文書に記載がないが、彼女もおそらく息子の後を追ったのであろう。

4. 有力な王妃と女王

王妃は、最高権力者である王との関わりを通じてそれなりの影響力を持っていたとみられ、時代の流れや王権の伸展にともなって、その権威が高まる場合があった。たとえば異民族ヒクソスに対する「国土解放戦争」が領土獲得のための戦争へと拡大していった第18王朝初期には、軍事国家体制を確立し、王権を強化しようとする王のため、パートナーとして活躍する王妃が現れている。まずこの王朝の初代アハモセ1世が若年で即位して先王カモセの「解放戦争」を引き継ぐと、カモセの王妃だったアハホテプ2世が摂政となって、軍隊の育成や国内の秩序維持に貢献した³⁾。アハモセ1世の姉妹で正妃だったアハモセ・ネフェルトアリは、おそらく王権を国家神アムン・ラーの権威と結びつけ強化するための政策として、アムン・ラーの重要な神官職である「アムンの神妻」に任命されている³⁾。この地位とそれにとまなう職禄は王家の女性が相続することが定められ、それによって女性王族の権威はこれまでになく高められることとなった。アハモセ・ネフェルトアリは、おそらくこの「アムンの神妻」の権限で、

各地の神殿への供物奉獻を盛んに行い、王の行う神殿造営事業にも関与するなど、本来は王の職務である祭祀活動に積極的に関わっている³⁾。

アメンホテプ3世の正妃ティイ（前述）の場合、彼女の夫は新王国の最盛期の王であり、王権も絶頂に達していて、彼女の権威も極めて高かったとみられる。ティイについては、通常は王の表現に用いられるスフィンクスの姿で浮彫に示された例や、王と同じ大きさの巨像で表された例がみられるが、これらはこの王妃の持っていた影響力の大きさを示すと言えるだろう³⁾。

ティイの息子アメンホテプ4世（アクエンアテン）の正妃ネフェルトイティも、通常の王妃をしのぐ影響力を持っていたと思われる。彼女の夫は、王権をおびやかす勢力となっていた国家神アムン・ラーの神官団を打倒するため、太陽神アテンを唯一の神とする「アマルナ革命」を断行した王であり、ネフェルトイティは王とともにこの「革命」の推進役となったのである。当時の神殿浮彫には、アテン神を礼拝する王夫妻の姿がしばしば表現されているが、ネフェルトイティが単独で礼拝を行う場面も多くみられ、この王妃がアテン信仰において重要な役割を担っていたことがうかがえる³⁾。また、貴族たちが礼拝に用いた石碑には、アテンのほかに王と王妃が必ず表現されており、ネフェルトイティが、おそらくは「革命」によって迫害された古くからの女神たちの代わりとして崇拜の対象とされていたとみることができる³⁾。

先代国王の死後に王位を継承した王子が幼かった場合、前述のアハホテプ2世のように、先代の王妃が摂政となり、王が成長するまで統治の任にあたることになっていたであろう³⁾。王子が生まれなかった場合など王位の父子相続が困難なときには、先王の兄弟や傍系の男性王族が即位したが、王位を継承すべき王子も男性王族もない場合が稀にあり、そのようなときには有力な女性王族、とくに先代王妃が即位して、「女王」となったとみられる^{3) 4)}。王女のなかには王族以外の男性と結婚している者がいただろうが、そうした男性が王位につくことで王権が別の一族に移るという事態は、王家にとって好ましくないとされただろう。

一般に女王の即位は、男子による王位継承が困難となり王家の血筋が絶えようとしている「非常事態」で、事実、王朝時代の女王として名が知られている4人のうち3人までは王朝最後の王となっている。

そのなかで同時代の資料から実在が確認できる最初の女王である第12王朝のソバクネフェルは、第6代アメンエムハト3世の娘で、次王アメンエムハト4世の姉妹でありおそらく王妃でもあった。彼女はアメンエムハト4世の死後、おそらくその後を継ぐ男子がいなかったため王位についたが、「父子相続」による王位継承という伝統に従い、父王アメンエムハト3世の後継者として即位したことを示す銘文を刻ませている⁹⁾。現存するこの女王の彫像断片は、女性の衣装に男性の王の衣装を合わせた姿を示しており、女性が王位につくという事態が極めて異例だったため、「女王」を表現する様式が存在しなかったことを暗示している^{4) 9)}。

第18王朝の女王ハトシェプストは他の女王たちに比べるとよく知られているが、王朝の末期に在位した王ではなく、エジプトの女王としては変則的な存在と言える。ハトシェプストは第3代トゥトモセ1世の嫡出の王女で、異腹の兄弟の第4代トゥトモセ2世の正妃となった人物であり、女性王族に引き継がれた「アムンの神妻」職を継承してその宗教的な権威と経済力を手中にしていたとみられる。トゥトモセ2世との間には王子が生まれず、早世した夫の次に即位したのは側室の子のトゥトモセ3世だったが、この王はまだ幼かったために、ハトシェプストが摂政となった。こうして政治権力を掌握した彼女が「アムンの神妻」の権威を利用して勢力を拡大し、やがて王に近い権勢を振るうようになったことは、カルナク神殿のオベリスク建造という本来は王の行うべき事業を、摂政として命じていることなどからうかがえる^{3) 4) 10)}。

とはいえ、もしハトシェプストが摂政にとどまり、トゥトモセ3世の成長とともに実権を譲っていたなら、少なくとも形の上では、王妃に期待されていた通常の役割を果たしただけで終わったことだろう。ところがハトシェプストはトゥトモセ3世の治世7年までに即位して3世の共同統治者となるのである。これはまったく異例なことであった。まず共同統治はすでに第12王朝時代から行われていた統治方式だが、それは父王が後継者の王子を2人目の王とするもので、摂政が2人目の王となる共同統治は前例がない。また女王の即位は、前述のようにおそらく男子の王位継承者がいない場合の非常手段であり、すでにトゥトモセ3世という王が在位している状況でハトシェプストが女王となる必然性はなかったと考えられるのである。

ハトシェプストは、王妃の役割を重視する第18王朝初期の宮廷で生まれ育ち、おそらく強い政治的野心を持つようになっていたのであろう。摂政の頃にオペリスクの建造を命じた時期も即位の直前とみられており、ハトシェプストが王位をめざして着々と地歩を固めていたことがうかがえる。彼女は、自らの即位が慣例に反したものであることをおそらく意識しており、王についての「建て前」に従うことで即位を正当化しようと計った。テーベ西岸デル・エル・バハリに造営されたハトシェプスト女王葬祭殿には、前述のように、ハトシェプストが太陽神アムン・ラーの子として生まれ、父王によって後継者に指名されたことを示す浮彫が刻まれている。自分は太陽神の血筋を引く存在で王としての資格があると主張するとともに、「父子相続」により王位を継承したとする主張を（かつての女王ソベクネフェルと同じく）行っているのである。ハトシェプストはさらに、自分を男性の王の姿で表した浮彫や彫像を数多く作らせたが、これは（やはりソベクネフェルの場合のように）男性の王の表現様式を借用し「王は男性」という建て前を尊重したものと言えるだろう。

ハトシェプストが世を去った後、単独統治者となったトゥトモセ3世は、この女王が存在した痕跡を抹消した。王として表現されたハトシェプストの浮彫や彫像は破壊され、銘文からはその王名が削られたのである。なぜこのようなことが行われたのだろうか？

これはひとつには、ハトシェプストが創造神の後継者たる王として失格とされたためと考えられる。この女王の治世は建築や美術が隆盛を迎え、ブント（現在のソマリア）との交易も行われるなどおおむね平和な繁栄の時代であった。ところがその反面、北部シリアの大国ミタンニの勢力拡大によって治世末期にはエジプト勢力圏の西アジア諸侯の多くが離反し、トゥトモセ3世は単独統治者となるやただちに出兵せざるをえなかった。ハトシェプストの統治は、結果としては王国に危機をもたらしたとみることができるのである。

しかしハトシェプストに対する「迫害」の原因は、この女王の即位と共同統治そのものにもあったと思われる。ハトシェプストは「父子相続」の伝統に従って、王権が父王から自分に譲られたと主張した。ソベクネフェルの場合のようにハトシェプストが単独の王であれば、これはおそらく問題にはならなかったであろう。ところが現実にはハトシェプストの夫



図5 男性の王の姿のハトシェプスト

トゥトモセ2世の息子でその王位を継承したトゥトモセ3世との共同統治が行われることとなった。これは互いに異なる王統に属する2人の王が並立する事態に他ならず、トゥトモセ3世にとっては、ハトシェプスト女王が存在したことを認めれば、自分の王統の正当性が疑われかねなかったとみることができるのである。

5. おわりに

ハトシェプストは、当時の王妃に許されていた権力の境界線を踏み越えてしまったために迫害の対象となったと思われるが、王権を補う神性を持つとされ、王に最も近い位置にいた王妃のなかから、この女王が出現したのは、ある意味で必然と言えるかもしれない。

紀元前4世紀の末からエジプトを支配したプトレマイオス朝のもとでは、「君主崇拜」が行われて王妃の権威も高まり、王と熾烈な権力闘争を繰り広げる王妃さえ出現する¹¹⁾。その最後の1人、女王クレオパトラ7世の死によって古代エジプト独立王国の歴史も終わるが、これは、エジプトの王権を三千年にわたって支えてきた王妃たちの系譜の最後を飾るものとして誠にふさわしい幕切れだったように思われるのである。

文 献

- 1) 内田杉彦:ピラミッドと王権. 明倫叢誌, 6(1): 55-61, 2003
- 2) 内田杉彦: 古代エジプトの女たち. 明倫叢誌, 10(1): 48-55, 2007
- 3) Robins, Gay : Women in Ancient Egypt. British Museum Press, London, 1993
- 4) Robins, Gay : Queens. Redford, D.B. (ed.) : The Oxford Encyclopedia of Ancient Egypt, Vol.3. pp. 105-109. Oxford University Press, New York, 2001
- 5) Kaplony, Peter : Die Inschriften der ägyptischen Frühzeit. I. Band, S.373-374. Otto Harrassowitz, Wiesbaden, 1963
- 6) ウィルキンソン, リチャード (内田杉彦訳) : 古代エジプト神々大百科. 東洋書林, 東京, 2004
- 7) 内田杉彦: 古代エジプト人と神々. 明倫叢誌, 7(1): 39-44, 2004
- 8) Malek, Jaromir : The Old Kingdom. Shaw, I. (ed.) : The Oxford History of Ancient Egypt. p.115. Oxford University Press, New York, 2000
- 9) Bryan, Betsy M. : In Women Good and Bad Fortune are on Earth : Status and Roles of Women in Egyptian Culture. Capel, Anne K. and Glenn E. Markoe (ed.) : Mistress of the House, Mistress of Heaven: Women in Ancient Egypt. pp.25-46, 189-191. Hudson Hills Press, New York, 1996
- 10) Habachi, Labib : The Obelisks of Egypt. pp.67-68. Charles Scribner's sons, New York, 1977
- 11) Hölbl, Günther : A History of the Ptolemaic Empire. pp.90-105. Routledge, London and New York, 2001